

ビールツーリズムを通じたロカリティの再編と広域化

—フランス・ノール県ダンケルク郡を事例に—

The Restructuring and Expansion of Locality through Development of Beer Tourism in the Arrondissement of Dunkirk, France

飯塚 遼 *・矢ヶ崎 太洋 **・菊地 俊夫 ***
Ryo Iizuka Taiyo Yagasaki Toshio Kikuchi

摘 要

本研究はフランス・ノール県ダンケルク郡を事例としてビールツーリズムの展開にともなうロカリティの再編について考察することを目的としている。ダンケルク郡におけるビールツーリズムは農村景観や集落景観などの農村を構成する要素が観光資源となり、それらが観光プロモーションプログラムを通じて結合されることにより存立していた。また、ダンケルク郡におけるビールツーリズムの空間は、同様のプログラムが設定されているベルギー側のウェストフーク郡にまで広がりを見せていた。そこでは、両地域の文化の共通性が観光資源に内包されていた。いわば、ダンケルク郡でフランスという国家的枠組に組み込まれたことで失われつつあったフランデレンのロカリティが、ビールツーリズムを通じて回復されていた。

I. はじめに

クラフトビールの世界的流行を背景として、ブルワリーやビール博物館、ビールフェスティバルなどを訪れる観光形態であるビールツーリズムが盛んになってきている (Hall and Sharples 2008; Everett 2016)。従来のビールツーリズムはイギリスにおけるパブクロールやドイツにおけるビアライゼのような、酔酩するためのはしご酒やビール愛好者によるマニアックなブルワリー訪問といった特殊な観光形態であった。しかし、近年ではビール愛好者ではない一般の観光者もブルワリーを訪問し、受け入れ側のブルワリーにおいてもブルワリー見学のツアーを行い、試飲施設を併設して観光者を取り込む姿勢がみられる。また、自治体の観光局においても、ブルワリーやビールイベントなどが地域の観光資源として積極的にプロモーションされている。

そのような状況を受け、ビールツーリズムに関する

研究も蓄積がみられるようになってきている。なかでも、アメリカやカナダ、オーストラリアといったクラフトビールブーム以降にビール醸造が発展したビール醸造新興国における研究が中心である。カナダのウォータールー＝ウェリントン地域を事例とした「エール・トレイル」の取り組みをライフサイクルモデルを援用して考察した Plummer et al. (2006) や、アメリカ・ノースカロライナ州を事例としてクラフトビールがルーラルツーリズムの資源として観光者からどのように捉えられているのかを議論した Murray and Kline (2015) などがある。また、Solcum (2016) はツーリズムトレイルにおけるクラフトビールの重要性についてアメリカ・アラバマ州ラウダン郡を事例に考察している。このように、ビールツーリズムに関する研究は、主にビールトレイルなどの特定の地域全体に関してのビールツーリズムの取り組みについて捉えており、個々のブルワリーとその周辺の観光対象との関係性や、それを踏まえたビールツーリズムの領域性についてはあまり検討されてこなかった。

そこで、菊地・飯塚 (2019) は、オーストラリアのシドニー都市圏を対象としてビールツーリズムの空間的広がりやロカリティを捉え、面的に展開する都市中心タイプと線的に展開する都市郊外タイプのビールツ

*帝京大学経済学部観光経営学科
〒192-0397 東京都八王子市大塚 359

e-mail iizuka-r@main.teikyo-u.ac.jp

**東京都立大学大学院都市環境科学研究科観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)

e-mail taiyo@tmu.ac.jp

***東京都立大学大学院都市環境科学研究科観光科学域
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)

e-mail kikuchan@tmu.ac.jp

ーリズムが存在することを明らかにした。しかし、そのような観光空間の領域性が地域に与える影響における文化的意義については議論の余地が残された。Rogerson and Collins (2015) が指摘するようにクラフトビールブームにともなうビールツーリズムの展開は新たなローカリズムを生じさせるものであり、その文化的意義を捉えることは持続的なビールツーリズムの在り方を捉えるうえでも重要である。そこで、本研究は伝統的なビール醸造文化が一時失われていたものの、クラフトビールブームによって復活しつつあるフランス・ノール県ダンケルク郡を事例として、ビールツーリズムの展開にともなうロカリティの再編について検証するものである。

II. フランスにおけるビール醸造

フランスといえばブドウから作られたワインのイメージが日本で定着しているが、フランスでは昔からビールが生産され、一般的なアルコール飲料として消費されてきた。ここでは、フランス全土のビール醸造の歴史と、ビール文化の中心であるノール県についてみてみよう。

1. フランスにおけるビール醸造の歴史

フランスでは、1878年にブルワリーの専門組合である Brasseurs de France が組織された。この組合に所属する醸造所はヨーロッパ外の領土に所在するものを含めて 308 か所を超え、フランスのビール生産のおよそ 98%を占める。この醸造所の組合の HP では、フランスのビールの歴史や、ビールツーリズムを紹介している。この HP を参考に、フランスのビールの歴史を概観してみよう。

麦類を加工したビールは紀元前 4000 年頃のシュメール文明で既に生産・消費されており、貿易や交流によって徐々にヨーロッパへと伝播していった。紀元前 4 世紀のガリア（現代のフランスとベルギーやスイスを合わせた範囲に該当）では、ビールをセルボワーズ (Cervoise) と呼び、一般的な飲み物として消費していた¹⁾。7 世紀初頭のフランク王国では、セルボワーズを生産する修道院が作られ、修道士が醸造技術の中心を担うとともに、ビールの品質を管理した。1170 年頃には現在のドイツ・ビンゲン周辺の女子修道院長であったヒルデガルト・フォン・ビンゲンがホップを添加することでビールの保存性を向上できることを広め、現在のビールのようなホップが使われたセルボワーズ

の生産が始まった。

現在のフランス語でビールを表すビエール (Bière) という名称は、1489年にパリの醸造家が制定した法令で使われ、セルボワーズという言葉は徐々に使われなくなった。1789年のフランス革命後には、修道院の財産が売却され、法人が廃止されたことで、ビールの醸造は一般の人々が担うことになった。

19世紀には、フランスの生化学者であるルイ・パスツールによって、低温殺菌の技術が開発され、ビールの品質の安定と大量生産が可能となった。特に、1890年以降、フランス北部ではビール生産が拡大し、1,336か所のブルワリーが稼働した。これらの醸造所は集落ごとに存在し、多様な種類のビールが生産された。また、フランス北部で生産されたビールは鉄道の発達に伴って、南フランスへ流通するようになった。1910年頃におけるフランス全土のブルワリーは 2,827 か所であったが、その内、フランス北部のブルワリーは 1,929 か所であり、フランス北部はフランスのビール生産の中心であった。

しかし、第一次世界大戦で多数の醸造所が破壊され、ブルワリー数はフランス全土で 919 か所まで減少した。その後、消費者の嗜好の変化や大量生産技術の発展に伴って、醸造所の数は徐々に減少していった。第二次世界大戦後の 1947年には 503か所のブルワリーが稼働していたが、1950年には稼働するブルワリーは 116 か所まで減少した。1960年ごろのアルコール依存症への規制によってビールの消費量は減少し、ミネラルウォーターや清涼飲料水にとって代わられた。その結果、ブルワリーは 1960年で 71 か所、1968年で 45 か所、1976年で 23 か所まで減少した。

1980年代に入ると、アメリカから始まったクラフトビールブームの影響を受けて、フランスにおいてもビールが再評価された。最近のフランスにおけるビールの生産量と販売額を示した図 1 をみると、2008年から

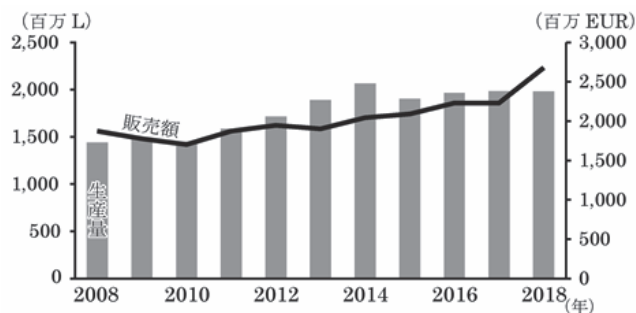


図1 フランスにおけるビールの生産量と販売額 (Agreste, Productions commercialisées des IAA より)

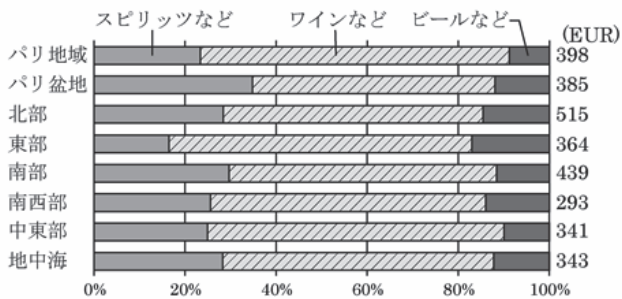


図2 フランスにおける地域別の世帯1人当たりのアルコール類への平均支出額 (2011年)
(Insee, enquête Budget de famille 2011 より)

の10年間でビールの生産量と販売額は共に上昇傾向であり、現在でもビールのブームは続いていることがわかる。加えて、フランスの地域別の世帯のアルコール類への支出額を示した図2をみると、地域によってアルコール類への支出構造が異なることがわかる。世帯のアルコール類への支出は、北部が最も多く、南西部で最も少ない傾向にあった。アルコールの種類別で見ると、ワインへの支出が最も多く、どの地域でも世帯のアルコール類への支出の50%程度を占めていた。ビールなどの支出をみると、各世帯のアルコール類への支出の割合において、東部と北部の地域ではビールへ支出する割合が他地域よりもわずかに高いことがわかる。

次に、フランスにおけるブルワリーの分布についてみてみよう。フランスのビール醸造組合であるBrasseurs de Franceに所属する醸造所262か所を図3に

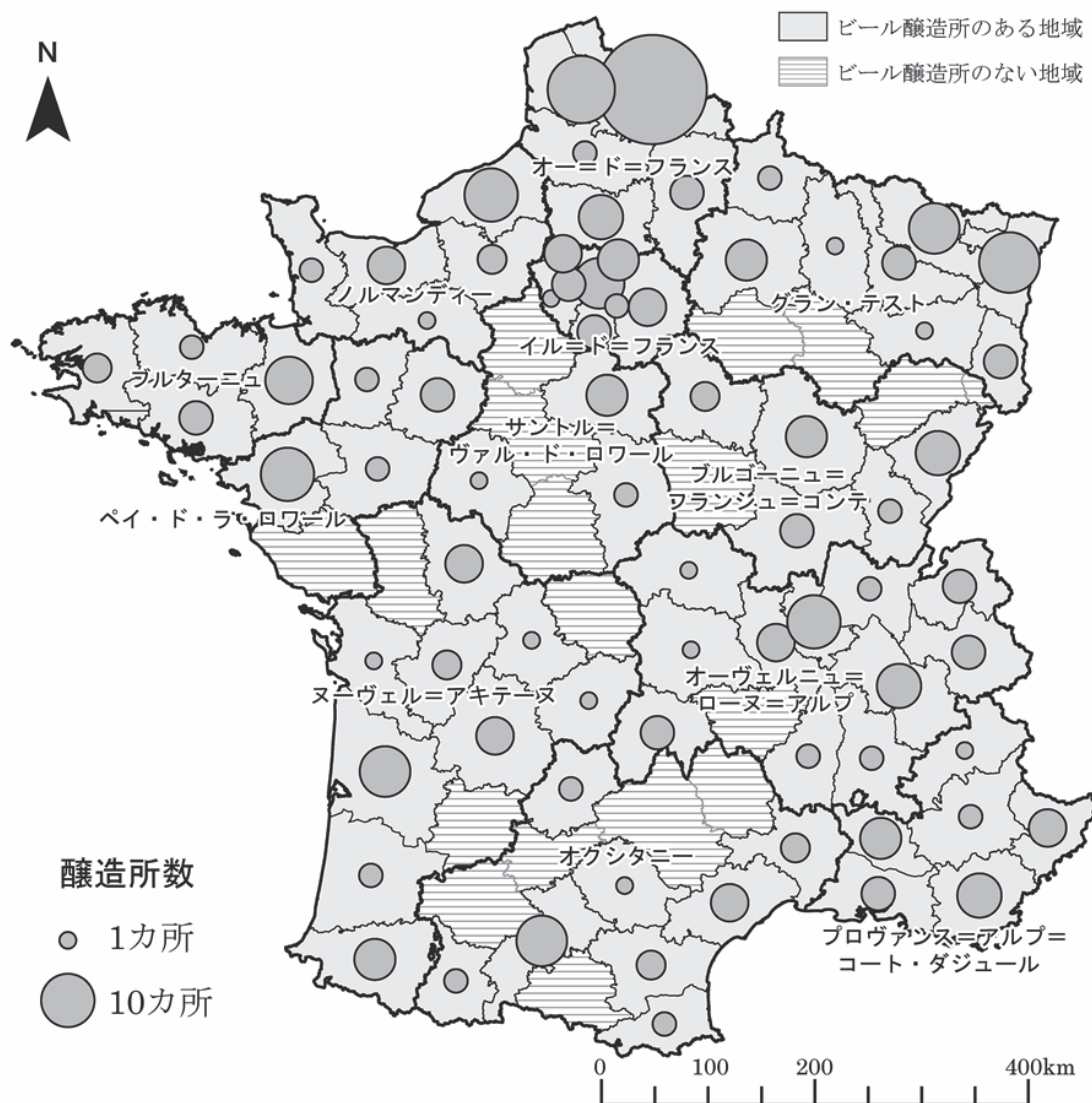


図3 フランスにおけるブルワリーの分布 (2019年)
(Brasseurs de France データより作成)

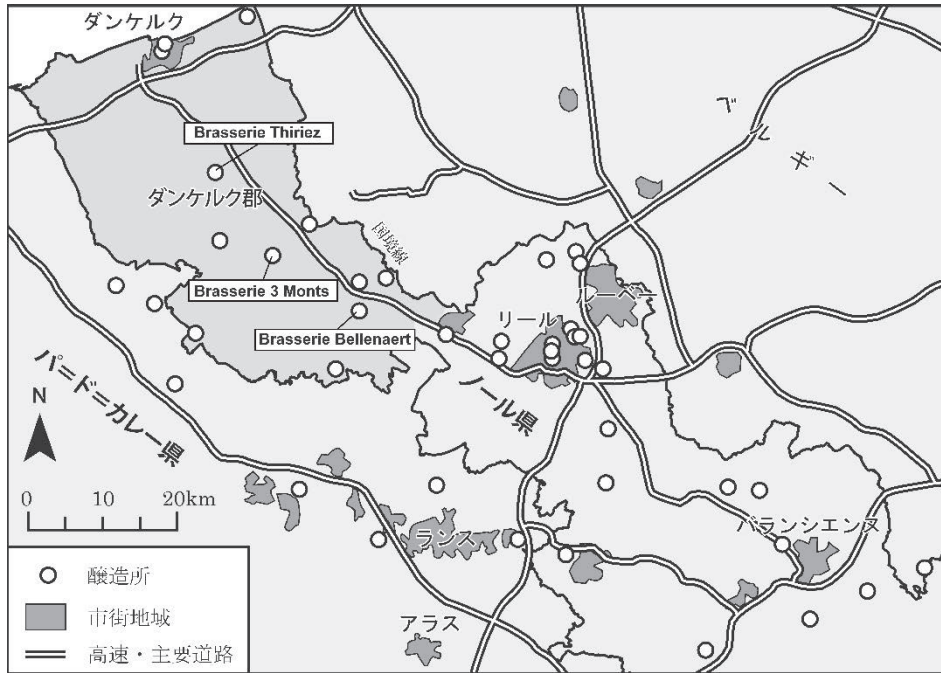


図4 フランス北部のブルワリーの分布
(Brasseurs de France データおよび各ブルワリーHP より作成)

示した。ただ、このブルワリーの組合に所属していない醸造所も存在するため、反映されていない醸造所が存在することに留意が必要である。ブルワリーの分布をみると、ブルワリーの立地しない県 (Department) が存在するものの、フランス全土に分散して立地することがわかる。ビールはフランス全土で消費されるだけでなく、様々な地域で生産されていることがわかる。

この立地をもっと詳しくみると、ブルワリーはフランス北部のオー＝ド＝フランスに44か所、パリを有するイル＝ド＝フランスに30か所が所在し、フランス北部にブルワリーの偏在がみられる。2017年のイル＝ド＝フランスの人口が約1,217万人 (Insee より) であり、オー＝ド＝フランスの人口が約600万人であることを考えると、オー＝ド＝フランスはフランス有数のブルワリーの集積地であることがわかる。特に、オー＝ド＝フランスのノール県には、26か所の醸造所が立地しており、フランスのビール醸造において重要な意味を持つことがわかる。

以上から、フランスにおいて、ビール生産は一時期において衰退の傾向にあったが、ビールブームの影響を受けて復古しつつある。特に、ノール県は昔からビールが消費される地域であり、フランスのビール文化の中心ともいえる地域であった。次の章では、ブルワリーの詳細な実態についてみてみよう。

Ⅲ. ノール県ダンケルク郡におけるビール醸造とツーリズム

ノール県はフランスにおけるビール醸造が卓越する地域のひとつである。なかでも北部に位置するダンケルク郡 (Arrondissement de Dunkerque) には、12か所のブルワリーが立地しており、ノール県のなかでもブルワリーの集積がみられる地域である (図4)。ダンケルク郡は、フランス国土の極北に位置しており、ベルギー・西フランドレン州ウェストフーク郡に接している。中世にはダンケルク郡一帯は現在のベルギー・フランドレン地域の西半分を支配していたフランドレン伯領の一部であり、17世紀後半からフランスの領土となった。そのため、ダンケルク郡に該当する地域は *Franse Westhoek* (フランセ・ウェストフーク) とも呼ばれ、ベルギー側のウェストフーク郡と文化的共通性がある。そのような文化的共通性は、例えば、レンガに漆喰を施した家屋や風車、巨大な人形が街を練り歩くカーニバル、肉の煮凝りや牛肉のビール煮込みの食文化などにも見られる (de Vries, 2016)。また、飲酒文化においてもワインではなく、ビールが伝統的に醸造されてきた。

その一方で、言語においては、やはりベルギー側と共通する言語の西フランドレン語が使用されていたが、

19世紀以降の標準フランス語による言語統一の強化とともに第二次世界大戦後における産業の発展による首都パリとの交流の増大を背景として急速に話者数を減らした。ダンケルク郡においてはフランスの他地域と同様にフランス語が優勢であり、西フランデレン語は地域言語としてかろうじて残存している程度となっている (Baycroft, 2004)。つまり、ダンケルク郡はベルギーのウェストフーク郡と文化的共通性を有している一方で、その一部はフランスという国家の枠組みに取り込まれるなかで失われてきたという複雑な文化事情が背景に存在する地域である。

そのような伝統的ビール醸造地域であるダンケルク郡のブルワリーは、その規模から大きく3つのタイプに分類される。1つは年間醸造量が1,000kl以上の大規模ブルワリーである。このタイプのブルワリーの多くは地域に根付いた老舗のビール会社として位置づけられる。2つ目は、年間醸造量100kl以上1,000kl未満の中規模ブルワリーである。これらのブルワリーには、家族経営の伝統的ブルワリーのほか、近年設立されたブルワリーも含まれる。そして、3つ目が年間醸造量100kl未満の小規模ブルワリー以下である。小規模ブルワリーの大半が新出のブルワリーや流通が周辺地域に限られる極めて醸造規模の小さいマイクロブルワリーである。以下では、そのそれぞれのタイプについてみていく。

1. 大規模ブルワリー「Brasserie 3 Monts」

Brasserie 3 Monts (ブラッセリー・トロワ・モン) はダンケルク郡中央部サン＝シルヴェストル＝カペル (Saint-Sylvestre-Cappel) に位置するブルワリーである。



写真1 Brasserie 3 Monts (Brasserie de Saint Sylvestre)の壁画
(2011年3月筆者撮影)

(写真1) Brasserie 3 Monts はダンケルク郡周辺において操業する最も古いブルワリーであり、その起源は1920年にレミ・リコール (Remi Ricour) によって設立された Brasserie Ricour (ブラッセリー・リコール) にある。Brasserie Ricour は1985年に Brasserie de Saint Sylvestre (ブラッセリー・デ・サン・シルヴェストル) と名称を変え、2019年3月にはさらに Brasserie 3 Monts に名称変更しているが、現在も創業者の曾孫にあたるピエール・マルシカが経営最高責任者に就く、典型的な家族経営企業でもある。Brasserie 3 Monts は、年間の醸造量が7,200klにおよび、ダンケルク郡唯一の大規模ブルワリーである。そのような大規模ブルワリーでありながらも、原材料の麦類やホップにはノール県周辺のフランス北部で産出されたものを使用することにこだわりをみせており、地域の風土や伝統を意識した醸造がなされている。

ブルワリーの名称ともなっている「3 Monts」は、同ブルワリーが醸造する基幹銘柄でもある。3 Monts は、先代のセルジュとフランソワのリコール兄弟によって1984年に誕生した。その当時、Brasserie de Saint Sylvestre では時代のビール消費の状況に対応してすっきりとした飲みやすいラガービールを中心に醸造していたが、リコール兄弟はフランデレン地域の伝統的なビール醸造に回帰することを目指してエール酵母を使用したビールの醸造を復活させたのである。3 Monts はダンケルク郡周辺で伝統的に醸造されてきた自家醸造ビールであるピエール・ド・ギャルドのブロンド・タイプである (写真2)。3 Monts (3つの山の意) の名称は、ブルワリーが位置するサン＝シルヴェストル＝カペルから見える「Mont Cassel (モン・カッセル)」



写真2 ピエール・ド・ギャルドの3 Monts
(2011年3月筆者撮影)

「Mont des Cats (モン・デ・カ)」、 「Mont des Récollets (モン・デ・レコレ)」という3つの山に由来しており、銘柄名も地域を意識したものとなっている。Brasserie 3 Monts では、その他に3 Monts と並ぶ基幹銘柄で主として周辺地域に流通するピルスナー「Luxe Du Moulin (リュクセ・ドゥ・ムーラン)」、ブルワリー伝統の酵母が醸し出すフルーティーな香りとアルコール感が特徴の「Grande Réserve Triple (グラン・レゼルヴ・トリプル)」や、近接するベルギー・エノー州周辺の伝統的ビールスタイルであるセゾンにホップで香りと苦みを強調した「Saison 2 Houblons (セゾン・ドゥ・ホブロン)」、オーガニックのブロンドビールである「Bio Pur Malt (ビオ・ピュア・モルト)」などが定番として醸造されている。また、より地域の伝統的醸造を意識した高級ラインの Héritage (エリタージュ) シリーズや、その年の収穫したてのホップを使用した季節醸造のスペシャルビールである Brassins Ephémères (ブラッソン・エフェメル) シリーズも醸造されており、醸造のラインナップは幅広い。

Brasserie 3 Monts では、個人での見学を受け付けてはいないが、10人以上の団体であれば予約制で見学を受け入れている。また、ブルワリーの向かいにはサン＝シルヴェストル＝カペルのエスタミネ(居酒屋)が立地しており、フランデレン地域の郷土食と共に Brasserie 3 Monts のビールを楽しむことができる。

2. 中規模ブルワリー「Brasserie Thiriez」

Brasserie Thiriez (ブラッセリー・ティリエ) はダンケルク郡の中央部 Esquelbecq (エスカルベック) にある家族経営のブルワリーであり、ダニエル・ティリエによって1996年に設立された。ブルワリーは1945年



写真3 農家ブルワリーの建物を利用した Brasserie Thiriez

(2019年3月筆者撮影)



写真4 Brasserie Thiriez の醸造設備

(2019年3月筆者撮影)

まで稼働していた農家ブルワリーを改装して建てられている。地域の典型的な漆喰が塗られたレンガ造りの中庭型農家家屋で、まさにフランデレン農村のブルワリーであることを実感させる造りである(写真3)。そのように農家の建物を利用しているためスペースは限られているが、醸造設備はコンパクトにまとめられており、年間醸造量は200klほどにもなる(写真4)。

Brasserie Thiriez では、周辺地域で産出されるホップを活かしたビールの醸造を得意としており、セゾンスタイルの「La Blonde d'Esquelbecq (ラ・ブロンド・デスカルベック)」やモルトの穏やかな甘さと香ばしさが特徴の赤褐色ビエール・ド・ギャルドである「L'Ambrée d'Esquelbecq (ランブレ・デスカルベック)」、小麦を使用してホップの苦みを控えめに仕上げたベルジャン・ウィットの「Les Québécoises (レ・ケベコワーズ)」のほか、地元産のホップとイギリスのホップ産地であるケントのホップをふんだんに使用してスパイシーな香りと苦みを強調したセゾンの「Étoile du Nord (エトワール・ドゥ・ノール)」などが定番のラインナップとなっている。また、クラフトビールの流行にも敏感に対応しており、ボディとホップの香りと苦みを強調したダブルIPAである「Dalva (ダルヴァ)」や、高品質のサワービールを醸造するブルワリーとして世界的に注目されているアメリカ・テキサス州オースティンの Jester King Brewery とのコラボレーションのファームハウスエールの「La Petite Princesse (ラ・プチ・プロンセス)」などのスペシャルビールもある。このように、Brasserie Thiriez ではアメリカをはじめ、イタリア、オーストラリアなど海外のブルワリーとの積極的なコラボレーション醸造を行うことも大きな特徴である。



Brasserie Thiriez では、見学ツアーを行って観光者を

写真5 Brasserie Thiriez のエスタミネ調テイスティ
ングルーム

(2019年3月筆者撮影)

受け入れているほか、エスタミネを模したテイスティングルームを設けて試飲とボトルビールの販売も行っている(写真5)。さらに、ブルワリーにはゲストルームがあり、宿泊することもできる。

3. 小規模ブルワリー「Brasserie Bellenaert」

Brasserie Bellenaert (ブラッスリー・ベレナール) はバイユール基礎自治体内の小集落 Outtersteene (ウッテルスターネ) に立地するブルワリーである。ブルワリーの建物はガレージを利用しており、一見ブルワリーとはわからないような風情の小規模ブルワリーである(写真6)。ブルワリーの名称「Bellenaert」という名は、地域言語である西フランデレン語で(発音はベレナールト)「バイユールの住民」という意味であり、地域を意識していることが名称からも伺われる。そのような Brasserie Bellenaert のビール醸造は、まさに地域と環境



写真6 Brasserie Bellenaert の外観

(2018年5月筆者撮影)

に根差して行われている。ビールの原材料であるモルトとホップには地元産のものを可能な限り使用し、醸造されたビールは周辺のボトルショップやスーパー、飲食店のほか、バイユールとダンケルクにある直営のカフェで提供される。また、醸造設備は再生可能エネルギーの電力によって稼働しており、ガスは使用していない。

Brasserie Bellenaert では、地元産のホップを主体に使用したブロンドエールである「Belle Blond (ベレ・ブロンド)」, ブルワリーの位置する集落名を冠したアンバーエールの「BBO (Bons Baisers d'Outtersteene : ボン・ベイゼ・ドゥッテルステン)」, ホップの香りと苦みがアクセントとなったベルジャン・トリプルの「Bellenaert Triple (ベレナールト・トリプル)」を定番銘柄として醸造している。そのほか、他ブルワリーとのコラボレーションビールや1回醸造のスペシャルビールとして IPA やビエール・ド・ギャルドも醸造されている。

観光者に対する取り組みとしては、Brasserie Bellenaert では、ブルワリーツアーを開催しているほか、一般向けのオリジナルのビールを醸造できる体験醸造も行っている。また、先述したようにカフェもバイユールとダンケルクで直営しており、そこでも各種ビールを楽しむことができる。

4. その他のビールツーリズムの資源

ダンケルク郡においては、ブルワリー以外にもビールツーリズムに関連する地域資源が観光の対象となっている。それが、地域の居酒屋としてのエスタミネである。エスタミネは、いわゆるイギリスにおけるパブに相当する存在である。ダンケルク郡では、伝統的なエスタミネを保存し、観光資源として活用する取り組



写真7 Estaminet Flamand 認定のエスタミネ

(ベルグにて2019年9月筆者撮影)

みとして「Estaminet Flamand (エスタミネ・フラマン)」(フランデレンのエスタミネ)というプログラムがある。この取り組みは2017年にダンケルク郡内の2つの観光局 Hauts de Flandre (オー・ド・フランドル)と Cœur de Flandre (キュル・ド・フランドル)で始まり、2019年現在、ダンケルク郡域内に18軒が指定されている(写真7)。これらのエスタミネでは、単に地元のビールや郷土食を楽しめるだけではなく、フランデレン農村のルーラリティが反映されたインテリアや調製品を鑑賞し、民族音楽の生演奏や居酒屋での遊びを体験することもできる。また、地元住民も日常的に利用する場であるため、地元住民と観光者とのコミュニケーションも生じる。ダンケルク郡において、エスタミネは単なる居酒屋ではなく、フランデレンの農村文化や日常生活を体験できる施設としても機能しているのである。

また、それらのエスタミネが立地する集落の多くは、Estaminet Flamandと同様に Hauts de Flandre と Cœur de Flandre によって設定されたプログラム「Village Patrimoine (ヴィラージュ・パトリモアン)」(村遺産)の集落としても指定されている。Village Patrimoine は、フランデレン農村の地域資源を遺産として保全し、活用するための観光プロモーションプログラムで、ダンケルク郡内には20集落が指定されている。指定された集落にはトレッキングルートが設定されており、集落

の中心となる教会や古城、美しい農村景観を展望できる田舎道、辻々に置かれているチャペル、そしてブルワリーやエスタミネなどフランデレン農村の地域資源を巡ることができる。さらに隣接するベルギー側の西フランデレン州のウェストフーク郡においても、国境を越えた共通プログラムとして「Charmant Dorp (シャルマント・ドルプ)」(魅力的な村)が設定されている。Charmant Dorp においても、フランスにおけるエスタミネにあたるフォルクスカフェ (Volkscafe) やブルワリーを巡ることができ、国境を越えてのトレッキングがプロモーションされている。このような伝統的なフランデレン農村の景観や文化といったものが、ダンケルク郡におけるビールツーリズムを支える観光資源となっているのである。

IV. ダンケルク郡におけるビールツーリズムとフランデレン・ロカリティの再編—むすびにかえて—

III章でみてきたように、ダンケルク郡におけるビールツーリズムは、農村を構成する要素が観光資源となり、Estaminet Flamand や Village Patrimoine などの観光プロモーションプログラムがそれらをつなげる形で存立している。それをモデル化したものが図5である。

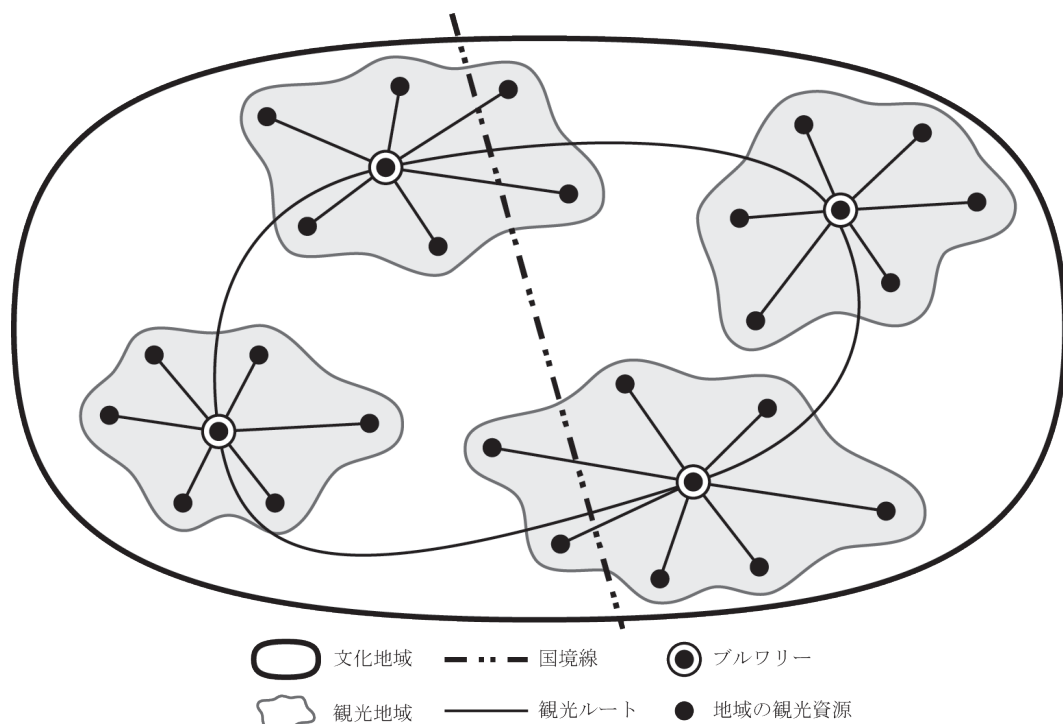


図5 ダンケルク郡におけるビールツーリズムの構造

図5によると、ブルワリーを中心として観光者が農村景観やエスタミネなどの周辺の観光資源を享受する観光地域が形成されていることがわかる。そのなかで、ブルワリーは、ブルワリーツアーや直売を通じてビール醸造地域としてのフランデレンの文化を観光者に体現する役割を担っている。また、ダンケルク郡においては、年間醸造量7,000klを超える大規模ブルワリーから100kl未満の小規模なものまでブルワリーが立地していた。大規模ブルワリーにおいては、ブルワリーやビールに対する一般の人々の間における認知度も高く、団体を中心に観光者の集客も多い。その一方で、小規模ブルワリーについては、一般の人々の認知度は低いものの、ビール愛好者だけでなく個人のトレッキング客やサイクリング客が観光の途中に訪れることがある。つまり、そのような規模や一般の人々への認知度の異なるブルワリーが分布することによって、より幅広い観光者層を捉えることが可能となる多様な観光地域がダンケルク郡一帯に存在しているのである。

さらに、ブルワリーの周辺には関連する各種の観光資源が分布していた。それらは、エスタミネや農村景観、集落景観といったフランデレンの農村資源であり、その範囲は隣接するベルギー側の西フランデレン州ウェストフーク郡にまで及ぶ。さらに、それらの観光資源を結びつけ観光地域として体系化させるものとしてEstaminet FlamandやVillage Patrimoineなどの観光プロモーションプログラムが存在しているのである。そのような観光プロモーションプログラムにおいては、フランスのダンケルク郡とベルギーのウェストフーク郡の差異といったものはあまり強調されず、むしろ同じ「フランデレン」という地域としての歴史・文化的共通性を享受するものとなっている。例えば、地域のビール醸造の伝統を受け継ぐブルワリー、エスタミネとフォルクスカフェの居酒屋文化、ビールの原材料としてのホップの耕作景観、なだらかな波浪状の地形や低地ポルダーなどの農村景観(写真8)、漆喰を塗ったレンガ造りの家屋が建ち並び、鐘楼や教会の尖塔がそびえ立つ集落景観(写真9)といったものが国境を越えて同様に観光資源として捉えられているのである。つまり、それらの観光資源は「フランデレン」という地域の歴史・文化的共通性に根差しているとともに、そのような共通性が国家を越えた観光地域への拡大をもたらしているのである。

このようにみても、ダンケルク郡においては、19世紀以降パリという国家の中心との社会・経済的関係性のもとに失われてきた、フランスという国家の枠



写真8 ダンケルク郡の農村景観
(フレートルにて2018年5月筆者撮影)



写真9 ダンケルク郡の教会の尖塔が見える集落景観
(オントスホートにて2019年9月筆者撮影)

では捉えきれない「フランデレン」独自の文化というもの、ビールツーリズムを通じて地域に還元されているのである。具体的には、フランスとベルギーの国境の変遷の様相を示した図6によれば、フランデレンの多くの地域は17世紀にフランス領に編入され、一部はベルギー領になった。このように、フランデレン地方は国境によってフランス領とベルギー領とに分割されてしまったが、本来は「フランデレン」というひとまとまりの文化地域であった。したがって、この地域はビールツーリズムを通じて観光者は「フランデレン」の歴史や文化を意識するとともに、観光資源を提供する側の地元住民にとっても地域的独自性やアイデンティティとしての「フランデレン」のロカリティというものを意識させるものとなる。

このように、ダンケルク郡におけるビールツーリズム

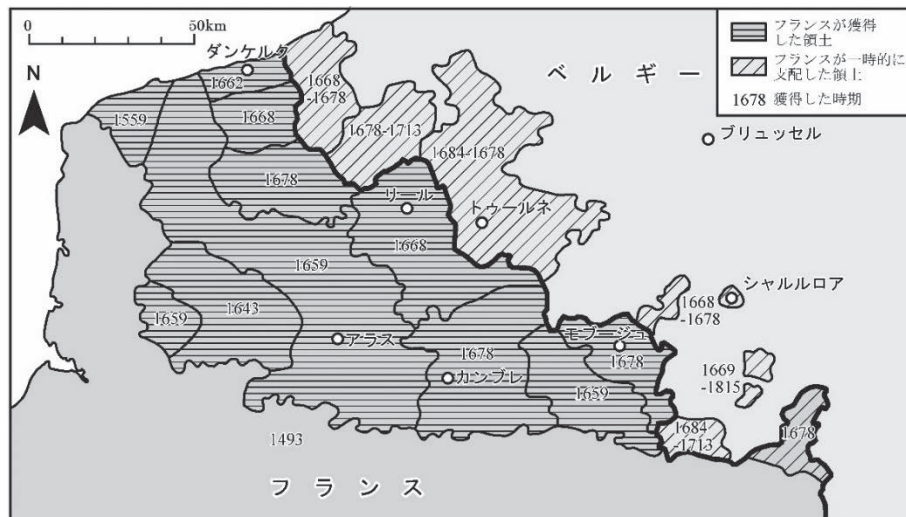


図6 フランス・ベルギー国境地域における国境の変遷

(Clout (1975) より作成)

ムは、歴史や文化に根差し、国家としてのフランスとの差異を強調するフランデレン農村の資源が観光資源としてみなされることにより存立している。そして、ビールツーリズムを通じて、フランデレン農村の伝統文化が復権しているともいえよう。いわばフランデレンのロカリティの回復という要素が、ビールツーリズムに内包されているのである。

参考文献

菊地俊夫・飯塚 遼 2019. シドニー大都市圏のビールツーリズムの発展にみる地域資源の再編プロセス. 観光科学研究, 13: 33-41.

Baycroft, T. 2004. *Culture, Identity and Nationalism: French Flanders in the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Royal Historical Society.

Clout, H. 1975. *The Franco-Belgian Border Region*. Oxford University Press.

de Vries, A. 2016. *Vlaanderen: Een Culturele Geschiedenis*. Horizon.

Everett, S. 2016. *Food & Drink Tourism*. SAGE Publishing.

Murray, A. and Kline, C. 2015. Rural tourism and the craft beer experience: Factors influencing brand loyalty in rural North Carolina, USA. *Journal of Sustainable Tourism* 23(8-9): 1198-1216.

Plummer, R., Telfer, D. and Hashimoto, A. 2006. The rise and fall of the Waterloo-Wellington Ale Trail: A study of collaboration within the tourism industry. *Current Issues in Tourism* 9(3):

191-205.

Rogerson, C. M. and Collins, K. J. 2015. Beer tourism in South Africa: Emergence and contemporary directions. *Nordic Journal of African Studies* 24(3-4): 241-258.

Slocum, S. L. 2016. Understanding tourism support for a craft beer trail: The case of Loudoun County, Virginia. *Tourism Planning and Development* 13(3): 292-309.

Brasseurs de France: Accueil;

<https://www.brassers-de-france.com/> (アクセス日 2020. 09. 15)